

言葉の呪縛性を言葉によって乗り越える

——「日本」は「面白い」とはどういうことか

水戸淳子

- 1 : はじめに
- 2 : 問題提起 —言葉の意味付けの自己中心性—
- 3 : 総合活動型日本語教育の実践
- 4 : 学習者Aさんの記録分析
 - 4 —1 : 4月20日3限のクラス内発言記録
 - 4 —2 : 4月26日のAさんの原稿
 - 4 —3 : 4月27日のクラス内発言記録
 - 4 —4 : 5月11日のクラス内発言記録
 - 4 —5 : 5月24日のAさんの原稿
 - 4 —6 : 5月25日のクラス内発言記録
- 5 : まとめ

1 . はじめに

私たちは、考え・表現をする行為において、言葉をいわば一種の道具として使用している。言葉によって、世界を切り分け、「名前」を与え、そこに「意味」を与えることによって、世界を秩序あるものとして認識することができる。ヘレン・ケラーの伝記を思い出すまでもなく、「言葉がない」世界は、混沌でしかないだろう。

人間が言葉を使うという行為は、混沌の世界に、「光」を差し込ませる行為に似ているのではないだろうか。自分の感情や思考、認識といった、人間の頭の中にあることというのは、喩えてみれば、暗黒の宇宙に浮かぶ「星雲」のようなものではないかと私は考えている。そこに「あるもの」なのではあるが、言葉 という「光」が差し込

まれなければ、その存在が浮かび出されないようなものであり、ある意味、その時の「光」によって、存在が規定・制約された形で認識せざるを得ないものだと言えるのかもしれない。

今回、このレポートでは、ある対象に対して、自分が最初に言い表した言葉によって、思考・表現が硬化してしまっている現象に注目した。これは、言葉によって、逆に、表現・思考が固まってしまったという現象、喩えて言えば、星雲を、一つの光線でのみ捉えようとしてしまい、その見方から中々抜け出せなかったという例である。この硬化現象について検証、考察するとともに、もう一方で、この現象を、やはり言葉を用いて乗り越えていくプロセスについて、「総合」の授業活動の記録データを使い、検証・考察してみたいと思う。

2：問題提起 ―言葉の意味付けの自己中心性―

私たちが言葉を使うとき、厳密に言えば、私たちは個々の言葉を自分で意味付けて使っている。たとえば、Aさんが言葉で「○○は面白い」と言ったとき、その面白さの具体的な意味というのは、実はAさんにしか分からないことである。また、BさんがAさんと全く同じ感情を抱いたとき（現実的にはありえないと思うが）、Bさんはそれを「○○はおかしい」という別の言葉で表すかもしれないのである。そして、さらに、Aさんの「面白い」という言葉を聞いて、Bさんが解釈する「Aさんの感じた面白さ」は、「Aさんが実際に感じた面白さ」と一致するとは言えないのである。

このように考えると、言葉を使用することの前提にある、言葉の意味付けという行為は、究極的、厳密的に考えれば、個人の内的な営みであることが分かる。しかしながら、私たちは、言葉というものを、まるで誰に対しても同じ流通価値を持つお金のように、誰に対しても同じ交換意味があるものとして使用しがちではないだろうか。コミュニケーション上の何らかの不可解さや誤解が生じたときにだけ、この、言葉の意味付けの自己中心性を認識するのではないだろうか。

このように考えると、自分が言い放った言葉から、逆に自分を照射して、なぜ自分がその言葉を使ったのかを考え・更に表現してみる行為を通じて、自分が本当に言いたかったことの核にあるもの、またはその周辺にあるものが見えてくるのではないだろうか。たとえば、上述した例で言うと、なぜAさんは、○○を「面白い」と形容したのか、そして、そこにAさんはどのような意味を与えていたのかを探り、言いたい

ことの周辺，そして核の部分をはぐし出していくと，Aさんには，より深く，○○に対する自分の感情・思考というものがつかめてくるのではないだろうか。

3：総合活動型日本語教育の実践

「総合」の授業活動では，自分にとって，関心や興味のあること，好きなことを対象として選び，対象と自分の関係について，5ページのレポートにまとめることが課されている。レポートの提出先は，教師ではなく，クラスの参加者全員であり，これは，いわば，学習者一人一人のレポート作成過程に，クラス全員が読み手として参加する形になっていると言える。

学習者たちは，各人が選んだ対象（○○）について，まず，「私にとって○○とは何か」という仮説を立て，それについて後に複数の人とディスカッションすることになっている。

私が今回注目したのは，「私にとって○○とは何か」という仮説形成に至るまでのプロセスにおいて課される，自分にとっての○○の意味を捉え返す過程である。自分にとって「関心のあること」「興味のあること」「好きなこと」について，「私にとって○○とは，～である」という形で表現するということは，それは，自分が「好きなもの」「興味があるもの」「関心があるもの」としてまず捉えていた対象について思考し，「好き」や「興味がある」「関心がある」ではない，別の言葉によって言い表さなくてはならないことを意味している。言ってみれば，自分にとって「好き」「興味がある」「関心がある」ということの内実について，思考・表現することが求められているのである。これは，いわば，これまで自分が対象に当ててきた光とは別の光を当てて対象を捉えるということである。

この仮説形成の過程においても，学習者の各々の過程に，クラス参加者全員が関わる。したがって，この過程では，自分が自分自身の言いたいことについて様々な方向から光を当てるだけでなく，他の人からも様々な光が投げかけられる中で，自分にとっての○○の意味を探索していくことになる。

今回，私は，この過程において，対象の捉え直しがスムーズにいかなくなった学習者の例に着目し，言葉によって，対象への認識が硬化してしまっている現象を取り上げながら，また，その硬化現象がどのように，逆に，言葉を用いたやりとりによって超えられていったのかという過程について検証・考察してみたいと思う。

4：学習者Aさんの記録分析

分析対象となったクラスでは、全部で17名の学習者がレポートを書き上げた。その中で、Aさんは、特に、仮説形成の過程において、クラス内でのやりとりが他の学習者に比べて抜きん出で多く、対象の捉え直しという作業に最も苦勞していたと思われる学習者の一人であった。

データの分析にあたっては、Aさんの仮説形成をめぐるクラス内のやりとりの記録と、Aさんが書いてきた原稿を、時系列でなぞりながら、Aさんの思考経過を追うように行なった。なるべくデータを寸断せずに、文脈を丸ごと示しながら、検証すべきやりとりや文章を提示したかったが、字数の関係上、筆者の責任において、重要だと思われるもののみについて取り上げた。なお、クラス内のやりとり記録については、発話ごとに順に通し番号をつけているため、どこが省略されているのかについては番号を見れば分かるようになっている。

4—1：4月20日3限のクラス内発言記録

やりとり

Aさんへの問いかけ	Aさんの発言
111:M さん：それではAさんは何について書こうと 考えていますか。	112:A さん：日本のお風呂屋さんについて書きたい と思っています。そのテーマはとても面白いです から。ベトナムにはお風呂さんはぜんぜんありませ んから、とても面白いです。

ここでのやりとりで、初めてAさんは自分の取り上げる対象を「日本のお風呂屋さん」とすることを表明し、その理由として、「面白い」からとこたえている。そして、「面白い」理由として、「ベトナムにはお風呂屋さんがない」からと説明している。

やりとり

Aさんへの問いかけ	Aさんの発言
115:M さん：嫌じゃない？ 知らない人と一緒にお 風呂はいるの？	116:A さん：今はぜんぜん嫌じゃないです。面白いと 思うだけです。お風呂屋さんにはほとんど学生さ んとおじいさんばかり。私の家にはお風呂がない

	<u>から、お風呂屋さんに行かなければならない。</u>
117:M さん：なぜお風呂屋さんについて書きたいですか？	118:A さん： <u>だから私の家にお風呂がないから</u>

Mさんの「知らない人と一緒に入るのは嫌じゃないか」という問いかけに対して、Aさんは、「嫌じゃない」とし、ここでも、お風呂屋さんに対しての感情を「面白い」と表し、自分がお風呂屋さんに行く理由について「家にお風呂がないから行かなければならない」と述べている。続いてMさんが「なぜお風呂屋さんについて書きたいのか」と問いかけると、一つ前に述べた「お風呂屋さんに行く」理由を繰り返す形で述べている。このMさんの「なぜ」という問いかけは、Aさんが自分が感じる「面白さ」の内実について自ら新たな光を当てるきっかけになり得るかもしれない質問だと思われるが、Aさんは、「お風呂屋さんについて書きたい」という気持ちがなぜ自分の中にあるのかについて、新たな光を差し込ませることなく、前に述べた「お風呂屋さんに行く理由」をそのまま使う形で受け答えをしている。

やりとり

A さんへの問いかけ	A さんの発言
121:M さん：A さんが「何とかと私」というテーマを選ぶとき、なんだったよかったわけですね。例えば「写真と私」とか。でも、A さんは「お風呂屋さん」と私について書こうと思った。それはなんでなんですか？	122:A さん：ああ。 <u>面白い</u> と思った。お風呂屋さんはベトナムに全然ない。はじめ、ちょっとびっくりした。その考えから、お風呂屋さんについて書くのはちょっと <u>面白い</u> と思った。

ここでも、Mさんは引き続き、「なぜお風呂屋さんなのか」について質問をしているが、Aさんは再び、「面白い」「ベトナムに全然ない」という、やりとり で述べた説明を繰り返している。「お風呂屋さんはベトナムにないから面白い」という論理はもちろん間違っていない。Aさんにとって、自分が体験したお風呂屋さんは、自分がこれまで体験してきた<ベトナム>のお風呂とは違うものであるから「面白い」というのは、ある意味普通の論理かもしれない。しかし、Aさんが体験したお風呂屋さんというのは、やりとり の中にあるように、「日本のお風呂屋さん」とただ説明して終わるだけのものではなく、Aさん個人が体験し、Aさん個人の中で認識した「お風呂屋さん」があるはずなわけで、それを「<日本の>お風呂屋さん」とまとめ上げ

て言うだけでは、＜ベトナム＞と＜日本＞の比較をするだけに終わってしまい、自分にとって、個人化された意味での「お風呂屋さん」の意味付けができないままに終わってしまう。

しかし、Aさんの発言の中に、これまで出てこなかった「ちょっとびっくりした」という言葉が初めて出てくる。「面白い」のは「ベトナムにないから」だけではなくて、「はじめ、びっくりしたからだ」というのも、Aさんが「面白い」という言葉に込めた意味の一部であることがうかがえてくる。

やりとり

Aさんへの問いかけ	Aさんの発言
128:I さん：(A さんに) さっき M さんさんがおっしゃったように「なんでお風呂屋さんについて書くのか」ということをもうちょっと考えて、ほかの事でなくお風呂さんだという理由...	129:A さん：そうですね。最初お風呂屋さん行ったとき、やりかた、ぜんぜんわからなかった。最初、シャワーに百円入れて、日本語、もちろん自分の日本語、最初ぜんぜん上手くなかったから、案内板わからなかったから、なかなかできなかった。

ここでは、I さんがMさんに代わって、「なぜ、他のものではなくお風呂屋さんなのか」という理由について再びAさんにきいている。Aさんは、「そうですね」と受け止め、最初にお風呂屋さんに行ったときの戸惑いの経験について話しはじめている。「なぜお風呂屋さんなのか」という問いについての答えは返していないものの、「なぜお風呂屋さんなのか」と聞かれ続けていくうちに、「ベトナムにはない→面白い→だから書く」という最初にAさんが言語化していた直線的な論理展開以外の言葉、この場合では、お風呂屋さんとの最初のエピソードについての言葉が拓けかけてきている。

やりとり

Aさんへの問いかけ	Aさんの発言
130:I さん：じゃあ、A さんにとって、お風呂屋さんはなんですか... ここに書いてある... 「私にとってお風呂屋さんとは何か」ってわかりますか？ それがないとレポートが書けないと思う。	131:A さん：まだそこまで考えてない。 <u>日本</u> のお風呂屋さんの案内所は全部日本語で書いてある。でも、私の日本語は上手くないから、全部は読めなかった。なかなか入れなかった。

Iさんはここで単刀直入に、「Aさんにとって、お風呂屋さんはなんですか」と、仮説の形での表現をAさんに求めるが、Aさんは「まだそこまで考えてない」と、仮説については語る言葉を持ちあわせていないことを告げている。しかし、その後で、再び、一つ前やりとりの中で話していた「案内所（板）は日本語で書いてあるから...」の話を繰り返している。Aさんの頭の中では、お風呂屋さんでのエピソードについて想起しつつあるが、まだあまりそのプロセスは進んでおらず、言いたいことに対して同じ言葉の光を投げかけているようにうかがえる。

やりとり

Aさんへの問いかけ	Aさんの発言
134: Pさん：あの、面白いだと思います。テーマは面白いだと思いますけど、あの、お風呂が、銭湯が、あなたにどういう意味をもつか... 好きとか嫌いとか、面白いとかだけじゃなくて、あなたのオリジナリティが見えないから、それが何って知りたいです。	135: Aさん：お風呂屋さん、 <u>ベトナム</u> にありませんよね。入ったとき、お風呂屋さん、あんまり好きじゃなかった、嫌い。

ここでは、Pさんが、「お風呂が、銭湯が、あなたにどういう意味をもつか.....知りたい」と鋭く切り込んでいる。それに対して、Aさんは、「ベトナムにないです、最初は好きじゃなかった」と、また、当初から言っている「ベトナムにはない」ということと、今度は、「面白い」の代わりに「好きじゃなかった、嫌い」という言葉でお風呂屋さんを形容している。

これら、～までの、Aさんの一番始めの、クラス内でのやりとりをまとめると、ここで見られるAさんの思考は、「日本のお風呂屋さんはベトナムにない。だから面白い。だからレポートに書きたい」という言葉を軸に展開され、他の人から「なぜお風呂屋さんなのか」と何度尋ねられても、その言葉を繰り返し、思考がそこで固まっている状態であることがうかがえる。Aさんは、「面白さ」の理由を「ベトナムにはないから」という＜ベトナム＞と＜日本＞を比較した形で述べているが、Aさんの感じる「面白さ」をクラスの参加メンバーと共有するには、「面白い」で思考・表現を止めずに、「面白さ」について、いろいろな言葉の光を照射して、「面白さ」の内実を浮かび上がらせていかなくてはならない。しかしながら、「面白い」で思考硬化が

起きているものの、やりとり で出てきた「びっくりした」という言葉や、やりとり で出てきたお風呂やさんでのエピソードなどから、Aさんが感じる「面白さ」について新たな光が少し照らされ、「面白さ」という言葉で一面的・固定的に捉えていた認識や感情が少しほぐれかけていることもうかがえる。

クラス内での以上のやりとりを踏まえ、Aさんは「お風呂屋さん和我」という以下の文章にまとめてくる。

4 —2 : 4 / 2 6 のAさんの原稿

お風呂家さんと私

私は発展途上国といゆベトナムで生まれましたからはじめて日本に來たのは色々な驚き事があった。今住んでいる家にお風呂んがないおでお風呂家さんに行かないわけにはいかない。もちろん最初にそんなことをぜんぜん知らなかったけどお家さんから紹介してもらいました。

ちょっと心配しました、なぜならばお風呂家酸に行くのはどうしようかなと思った。国によって違うかもしれない。皆さんのお国はどうでしょうか？日本人はお風呂に入る前にちゃんとshowerしたことをわからなかったから血気欲が恥ずかしい事をあった。お風呂家さんがひろくてきれいで皆さんは裸して一生に風呂に入ります。本当ビックリしました。私showerしなかったのにすんぐはいた、その時誰も私の方面に目を通してから。。。。

何にか間違ったかなと思っていた。

ああ、先いっしょうにはいた人 shower している。はい、分かりました。日本人はお風呂を使い方が違いますね...すごく恥ずかしかった。今までもう その恥ずかしい感覚が残っている。お風呂家さんにたび恥ずかしい事を思いだて来る。でも日本のお風呂家さんが面白いだと思います。皆さん 今度 行って見ましよう

ここで、Aさんは、自分とお風呂屋さんとの出会いについて、お風呂屋さんの習慣の違いに直面して恥ずかしい思いをしたこと、びっくりしたことについてのエピソードを織り込み、「ベトナムのと違うから面白い」という、前回のやりとりで出てきた思考・感情が少しほぐされてきて、自分が経験したどういう違いについて、どういう感情を持ったのかが少し具体的に表現されてきている。「面白い」という言葉は最後に1回出てくるだけで、新しく「恥ずかしい」「ひろくてきれい」という言葉が出てきている。

次の授業では、この原稿に基づいて、「面白さ」の内実についてのさらなる質問がされている。

4 —3：4月27日のクラス内発言記録

やりとり

Aさんへの問いかけ	Aさんの発言
201: Yさん：恥ずかしい思いをしたのに、でも <u>日本のお風呂屋さんが面白い</u> ，と思っているのは、どんなところが、どうして <u>面白い</u> とおもっているのか。で、何でもまた行ってみたいと思っているのかな、と。	202: Aさん：あの、 <u>日本のお風呂屋さんは広くてきれいだ</u> と思ってるのだと。今 <u>日本のお風呂屋さん</u> に行った後、 <u>気持ちがよくなる</u> 。 <u>日本のお風呂屋さん</u> に行きたいと思って。

まず、Yさんが「どんなところがどうして面白いと思っているのか」と聞くと、前回のやりとりで見られた「ベトナムと違うから面白い」という答えではなく、書いてきた原稿の中にある言葉である「広くてきれい。行きたいと思う」と、ここで新しく「気持ちがよくなる」という言葉が出てきている。

やりとり

Aさんへの問いかけ	Aさんの発言
206: クラス担当者：お風呂屋さんに来ている人と、あの、おじいちゃんとかと話したことはありますか？	207: Aさん：ありません。
208: クラス担当者：ない？じゃあ近所の人やおじいちゃんたちが話しているのを聞いてたことはありますか？	209: Aさん：あの、皆さん全然しゃべらない。
210: クラス担当者：ああ、そうですか。	

ここでは、クラス担当者が、Aさんの感じた「面白さ」というものがお風呂屋さんのもつ人と人とのふれあい、コミュニケーションにあるのではないかという推測から、「お風呂屋さんでのコミュニケーション」に的を絞って質問している。しかし、それについて、Aさんは、ここでは「ない」と答えている。

やりとり

Aさんへの問いかけ	Aさんの発言
211: 司会：じゃあ。面白いのはどういう風に。どうでしょう？お風呂についてですけど。	212: A：面白いのは，こういうやり方はベトナムにはありません。
213: 司会：じゃあ，日本式のお風呂についていろいろ感じているんですね。ここでは，シャワーをしてから湯船に入るので失敗した経験がありましたけど，他に何か，お風呂の使い方とか入り方で，気付いたこととか，発見したこととか。	214: A：あの，日本人は，お風呂に入る前にちゃんとシャンプーとか石鹸とかきれいにしてから入りますけど，ベトナムでは，国によってちがうかもしれないけど，ベトナムは，最初お風呂は入ってからあとでシャワーをします。それは反対。だから面白い。

この時たまたま筆者は司会をしていたが，筆者は，Aさんが感じた「違い」から，「面白さ」についてAさんが思考を深めていくことができるかもしれないと考え，上記の質問をした。ところが，この質問によって，逆に，「日本とベトナムでの風呂の習慣が違うから面白い」という表現に戻ってしまっており，固まっている思考・表現をほぐすことができていない。

やりとり

Aさんへの問いかけ	Aさんの発言
217: クラス担当者：違うから面白い。でも，それはただ違うだけですよ。	218: A：初めての，恥ずかしいこともあった。その感覚今まで残ってるから。

ここで，クラス担当者からの「違うだけでは「面白い」の説明にならない」という指摘を受けると，Aさんは，「面白さ」の説明として，「恥ずかしい」という言葉を出してくる。

やりとり

Aさんへの問いかけ	Aさんの発言
220: 司会：なるほど。なんか，こう裸の現場だから，結構感覚的に...一度失敗したのに，何でいやにならなかったんですかね。またやりたくなかった？入りたいって思ったんですかね？	221: A：私の家今，お風呂がなくて，毎日使うことになったから，それで面白いなって，毎日毎日いかなくてもならない。まず，恥ずかしいけれどもしょうがない。

222: Yさん：じゃあ，このお風呂屋さんのことについてこれからどんなことを書こうと思ってますか？最後は，この「お風呂屋さんは私」について最後，5枚のレポートを書くんですけど…。	223: A：初めての最後恥ずかしいことがあって…， <u>日本人</u> のお風呂の使い方と <u>ベトナム</u> は違う。
225: 司会：そうですね。あの動機と，仮説のところで，～にとって自分は何なんだ，っていうところなんですけど，その辺のところはどうですかね？お風呂の体験に就いて，どういうところを自分は学んだり，感じたり。ただそのお風呂の順番が逆だった，っていうことがわかっただけでなくて。	226: A：今度皆さんが行ってみれば，あのちゃんと案内書を読んで下さい。私はそのとき案内書を読まなかったから，恥ずかしいことあった。

220，221のやりとりを見ると，「なぜお風呂が嫌にならなかったのか」という質問に対して，「恥ずかしいけどしょうがない」という答えが，222,223のやりとりを見ると，「これからどんなことを書こうとしているのか」に対して「日本とベトナムは違う」という答えが，225,226のやりとりでは，「お風呂から感じたこと何か」に対して，「案内書（板）を読んでください」という答えが返ってきている。

これらの答えで使われている言葉を見ると，これまで使っている言葉が繰り返し出てきているにすぎないことが分かる。思考を内側に深めて，新たに対象を意味付ける過程が動き出さず，同じ言葉を取っ替えひっかえ使おうとしているために，225,226のやりとりのように，質問と答えがちぐはぐになっていることも分かる。

やりとり

Aさんへの問いかけ	Aさんの発言
227: クラス担当者：今A君にとってお風呂屋さんに行くことは何ですか？	228: A：必要。
229: クラス担当者：必要？必要だけじゃレポートにならない。	230: A：必要だけじゃなくて，お風呂屋さん， <u>日本</u> のお風呂屋さん，お風呂の使い方と私の初めて <u>日本</u> のお風呂屋さんの使い方わからなかったから，その恥ずかしいことがあった。
231: クラス担当者：あった。で，今は。	232: A：今…今は段々なれてきて。 <u>日本</u> のお風呂

	の使い方がいいな、とっていて、
233: クラス担当者: 何がいいの?	234: A: あのまず、シャワーしてから。皆さんのお湯一緒に使うから、まずシャワーしなかったら迷惑かけるかもしれないと思うから。いいと思います。

やりとり で見たように、Aさんから出てくる表現が「ベトナムと違う、面白い、恥ずかしい」といった言葉をめぐってただぐるぐる回っているだけなので、クラス担当者からここで、「お風呂屋さんに行くこととは何か」という正面切った突っ込みの質問がされている(227)。Aさんはそれに対して、「必要」(228)と答えているが、「お風呂屋さんに行くことはわたしにとって必要」という形で表現をしてしまうと、Aさんが対象化したお風呂屋さんがAさんにとっての主体的な意味を何も持たず、外在的な必要性という意味しか持たなくなってしまうため、クラス担当者から、「それだけじゃレポートにならない」(229)と指摘を受けている。それを受けて、Aさんは再び言葉を連ねるのだが、内容は、これまで述べてきたことの繰り返しにすぎない(230)。次に、クラス担当者から「今はどうなのか」(231)と質問され、今度は「いい」(232)という言葉を使って表現している。引き続き、クラス担当者に「何がいい」と聞かれ、「お風呂の使い方に合理性があること」(234)について述べているが、これでは、やはり、228に出てきた「必要」と同じように、自分にとっての「お風呂屋さん」の持つ意味を探し当てたことにはならない。このように、Aさんの思考・表現は、立ち往生し、混乱している様子がうかがえる。

以上のやりとりを踏まえて、Aさんは、5月10日にまた原稿を書いてくる(字数の問題上、割愛)。新たに付け加わった部分として、お風呂屋さんで、おじいさんと話をしたエピソードが盛り込まれている。しかしながら、Aさんにとってのお風呂屋さんの持つ個人的・主体的な意味につながる言葉は拓かれていない。ここまで、やはり、「面白さ」をめぐって、まだ思考硬化の状態から抜け出せていないと考えられる。この原稿を書いた後の5月11日の授業においても、再び彼を感じる「面白さ」について、以下のようにやりとりが繰り返された。最後の部分において、その「面白さ」についての思考がほぐされ始められる。

4 —4 : 5月11日のクラス内発言記録

やりとり

A さんへの問いかけ	A さんの発言
337: クラス担当者: ふーん。そうすると, 今お風呂屋さんに毎日行くんでしょ?	338: A : 毎日…。
339: クラス担当者: うん, なぜ毎日行くの?	340: A : 今住んでる家はお風呂が… (一同笑う)
341: クラス担当者: うん, じゃあ, お風呂屋さんに行くとなん気分になる?	342: A : あんあの一, お風呂屋さんは… 面白 い 。
343: クラス担当者: 面白い ? 何が 面白い ?	344: A : 面白い 。お風呂屋さんは広くて, きれい… (ジェスチャーで示す A さん) ゆっくりできます。

これらのやりとりでは, やはり, まだ, これまでの表現が繰り返されているだけである (家にはお風呂が…… (ない), 面白い, ひろくてきれい)。

しかし, 次のやりとりにおいて, A さんは自分の感じる「面白さ」について, 一つの手がかりを得ることになったと思われる。

やりとり

A さんへの問いかけ	A さんの発言
345: クラス担当者: うん, そう。で, おじいさんと話をするでしょう?	346: A : はい。
347: クラス担当者: おじいさんと話をしながら何を感じた?	348: A : あーん, あーん, お風呂やさんはでたばかりじゃなくて, 江戸時代, お風呂屋さんがでた。あの, あの, <u>日本の伝統的なしゅかん</u> , 文化, <u>日本の伝統的な習慣</u> かなーと思って…
349: クラス担当者: うん, それで, だから日本人は…, どうでもいいんだよ。日本人じゃなくて, A くんは, 今, お風呂屋さんに行って, 毎日行って, 何を感じてる? 何がいいと思う?	350: A : ???
351: クラス担当者: 今, 毎日行ってるんでしょ	352: A : ???

う？そこに行くと、何がいい。とても行きたい なと思って行くでしょう？ただ体がきれいにな るだけじゃなくて、もっと違う何かがあるでし ょう？それ、何です？	
353: クラス担当者：お風呂屋さんに行くときどんな 気持ちになる？どんな感じがする？	354: A：うーん、説明，しかた，ちょっとむずかしい けど，毎日お風呂屋さん，行きたい（断定的な口調 で）
355: クラス担当者：行きたい。何故？	356: A：お風呂屋さんが広くて、きれい。あのー、そ のー、皆さんの男の人がゆっくりして、話できま す。
357: クラス担当者：うんうん。それは、ベトナム の時はなかった？	358: A：なかった。
359: クラス担当者：ああ，うーん，じゃ，それが 仮説じゃない？	（「ああー，うーん」の声あり。なるほどという雰 囲気が流れ一同の安堵のため息に似たものが聞こえ る。そして笑い。）

ここでは、クラス担当者が、Aさんに対して、「お風呂屋さんから何を感じているのか、何がいいと思うのか」という質問をするが、Aさんは、350,352に見られるように、言葉が出ない状態が続く。353において、「お風呂屋さんに行くときどんな気持ちになる？どんな感じがする？」という質問を受け、Aさんは「説明，しかた，ちょっとむずかしいけど，…」と言っているが、この言葉から、Aさんはここで、これまで使ってきた言葉以外の言葉を探そうとしていることが分かる。そして、355において、クラス担当者が「なぜ、お風呂屋さんに行きたいのか」と問うと、これまで言ってきた「広くて、きれい」という言葉に続いて、「皆さんの男の人がゆっくりして、話できます」という言葉が初めて出てくる。

これが、突破口となり、Aさんは、自分が感じていた「面白さ」についての内実を探る過程が進んだと思われ、5月10日に書き上げた原稿に、以下の部分を付け加えている。

4 —5：5月24日 Aさん原稿

（5/10のものに新たに書き足されたところのみ）

お風呂屋さんは広くてきれいで二つ部屋があり皆さんがそので水とかタバコを吸いながら話し合うことができる。それからお風呂屋さんに行ったたび私は気持ちがよくなり友達の家にいるように感じる。

この原稿において、Aさんは、初めて、「お風呂屋さんで話し合うことができること」、「お風呂屋さんは気持ちがいいから友達の家にいるように感じること」、「お風呂屋さんは体をきれいにするためだけではなく、話したり知らないことを教えてもらったりして、人が親切なところだ」といったような、Aさんが感じるお風呂屋さんの「面白さ」「よさ」について、具体性を持って書き加えている。

次のクラス内ディスカッションでは、この新たに書き加えられた部分から、Aさんにとっての仮説である「私にとってお風呂屋さんは、〇〇である」がようやく生み出される。

4—6：5月25日のクラス内発言記録

やりとり

Aさんへの問いかけ	Aさんの発言
	408: A：なぜ、ぼくがお風呂屋さんをテーマを選んだのは、あのうお風呂屋の使い方が分からなかったから、恥ずかしい事があったから、そのテーマに、動機になりました。 <u>今、お風呂屋さんは私にとっては、うん</u> <u>ん、友達のところのように感じています。</u>
409: 司会：それは仮説ですからね、お風呂屋さん、ええと、友達に似たような感じで、友達のところにいたような感じが、つまりどういうこと？	410: A：あのところで、みなさん、洗って話し合っている、あのう知らない事も教えてもらって、みなさん、親切で、教えてもらっていることです。
411: 司会：だから、友達のうちにいるように感じているでしょう。だから、A君にとってはお風呂屋さんは？	
412: <u>Kさん</u> ： <u>友達のうち？</u>	413: A：うん、 <u>友達のうち。</u> （一同笑い）

司会に「お風呂屋さんとは何か」と問われて、Aさんが何も言う前に、Kさんが「友達のうち」という言葉を出す（412）と、Aさんもそれに同意する形で、「Aさんにとって、お風呂屋さんは友達のうち」という仮説が出来上がった（413）。

このように、ここでデータとしてとりあげただけでも、8名の人間がクラス中でのやりとりをAさんで行ない、その中で、Aさんの言いたいことについて様々な光が当てられ、最終的に、たどり着いたのが「友達のうち」という言葉であった。また、やりとりに至るまで、Aさんは、少しずつ新しい言葉で表現をしながらも、「面白い。日本のお風呂屋さんはベトナムにない。恥ずかしかった」などといった同じ言葉を何度も繰り返し使うだけで、中々自分にとっての「面白さ」の内実に光を当ててみる事ができていなかったといえるだろう。

5：まとめ

以上、見てきたように、Aさんがいかに、お風呂屋さんについて、一度作ってしまった「＜日本＞のお風呂屋さんは、＜ベトナム＞にはない。＜ベトナム＞のとは違う。だから、面白い。」という思考・表現の枠・型に囚われてしまい、数多くの問いかけを経ても中々抜け出せなかったことが分かる。

「総合」の授業で焦点化されているのは、「私にとっての」という、私の視点を明確に出した上で表現をすることである。レポートの最初に、「言葉の意味付けの自己中心性」として、「同じ言葉は誰に対しても同じ意味を持って流通しているように考えてしまいがちだが実はそうでない」ということを述べたが、「言葉」というものも、究極的には、実は「私にとっての」「言葉」なのである。つまり、何かを「面白い」という言葉で表現するならば、その「面白い」という言葉に意味付けられた意味は個人的なものなのである。「日本」という言葉を使うのであれば、それも、究極的には、その人が「日本」という言葉に意味付けた意味を指しているのである。

普段、言葉を使う時、私たちは、この言葉の超個人性ともいうべき、意味付けの自己中心性についてあまり自覚できていないように思われる。また、一度、言葉による思考によって意味付けた世界について、問い直しをしたり、捉え直しをしたりすることも忘れがちになっているのではないかと思う。自分がどれほど既成の「言葉」ととられ、そこに依存して思考してしまいがちなのかについての自覚を持たないと、自分の中にある既成の言葉が用意した思考・表現・認識・感覚しかできなくなってしまうのではないだろうか。

人と人との間に共有を生み出すコミュニケーションにおいて使用する「言葉」というものが、究極的には超個人的なものなのだという認識は、人を不安にさせるものか

もしれない。しかし、「総合」の授業活動がそうであったように、言葉の意味付けの自己中心性を意識化した上で、「私はどう捉えるか」という自己の光線を、場の参加者と互いに投げかけ合い、協働的に、自分の内にある意味世界について、共有化していく（ことを目指していく）ことが可能であるということもまた確かだと言えるのではないかと思う。

「総合」のような、協働的なコミュニケーションの場は、思考や表現のプロセスが一人の中で自己完結するのではなく、他者に開かれた形で、言葉の可能性が切り開かれていくという点において非常に重要な意味を持っていると思う。

言葉が、私たちの思考や表現を呪縛してしまうという危険性を持っていることを明示しつつ、しかし、言葉によってそれを乗り越えていくこともできるということを、「総合」の記録は示しているのではないだろうか。